

トピックス

意見交換



【質疑応答】 Q：質問、A：回答、C：コメント

司会／香山教授（室蘭工業大学）

第二部でいただいた他の講演も含めて意見交換に移りたいと思います。時間の関係で、質問、回答ともコンパクトにお願いしたい。ITER と ILC には共通事項は多々ありますが、大きな違いがあるとすれば、ITER ではエネルギー・環境課題に対する解決アプローチにもリンクしてナショナリズムとしてのエネルギーやセキュリティにつながる面がある一方、ILC は壮大な基礎科学であり、佐藤先生も言及されたように、誇りを持てる国を作るための要素としての側面があります。

Q：三間センター長（大阪大学レーザーエネルギー学研究センター、当時）

佐藤先生には私も教えてもらいました。先ほど佐藤先生が言いかけてやめられた、グローバリズムとナショナリズムの折り合いをどうつけていくのかは永遠の課題だと思います。大学を例にとると、本部・理事会と他部局との問題がそうであり、国レベルで言えば、橋下府知事の発言などで話題になっている政府と都道府県間の問題などもそうだと思います。本来折り合いがつくものなのかどうか、先生のお考えをお聞かせください。

A：佐藤議長（核融合エネルギーフォーラム）

グローバリズムとナショナリズムの折り合いの付け方は、簡単に言えば、私は教育というか人作りというか、言語が同じ一つの文化圏である国の責務だと思います。国際的に一つのことに向かって努力していることに対して、その国の若者が参入していくということがその国を救うのだと思います。教育や人作りの中で、あるいは国際的な大型プロジェクトを進める中で、グローバリズムとナショナリズムは折り合い、互いに結びついていると思います。

Q：三間センター長

オリンピックにチャレンジ精神で臨むというのは、ナショナリズムがドライビングフォースになっていないでしょうか

A：佐藤議長

そういう面もあるとは思いますが、ただ、体力の無い子もいますし、勉強の好きな子が生きていく世界も必要です。一般に子供は勉強しないと世間では言っていますが、ここにいる皆さんのように勉強好きな子っているでしょう。勉強の好きな子が生き生き燃焼できるシステム作りを国は考えていかないとなりません。最近、高校に出向くと、大半が体育会系ですね。垂れ幕があっ

たり、誰がどこの大会で何等になったとか。勉強好きな子には居場所がないのではないかと心配です。若い頃からポピュラーな本などを書いてきているので、私に人生を狂わされたと言う人がいますが、その人をよく見ると今の若い人より燃焼しているように見えます。

C：関理事長（高度情報科学技術開発機構）

佐藤先生にはいろいろ教えてもらいありがとうございます。「守るに足る国家」という話を聞いたとき、ITER 誘致に際して仏ルモンド紙が、エネルギー・環境問題で世界に貢献しうる ITER をフランスに誘致して積極的に取り組まずしてどうするというような論調の社説を書いた記憶が鮮明に残っています。日本の新聞では当時そういう記事は全くなく、グローバルな感覚の欠如を痛感しました。今は ISS や ITER もあり、ILC も検討が進められていることから、ナショナリズムの前にグローバリズムの考えの中で日本がどうやっていくかを考える機会が多くなったのではないかと思います。

C：疇地教授（大阪大学レーザーエネルギー学研究センター、当時）

若い人の人材養成が大事だという話がありました。今日のご講演の中では直接は言われなかったと思いますが、冷戦後の大学人の最重要課題は人を育てることであるということを佐藤先生はどこかで書いておられたと思います。全くその通りだと思うのですが、ここ数年の状況は相当危機的と言えます。大学の中の附置研は、従来は学部教育に直接関わらなくとも今までは何とかなっていました。独法化後は大学間で競争させてサイエンスを伸ばすということになり、何が起こったかという、一つの大学にずっといて外にあまり行かない、学部で研究室を選んだら大学院に行くときも変わらない、という状況になってしまった結果、附置研にいく学生が激減しています。当センターを見ても大学院生が半分になりました。他の附置研も同じ状況のようです。まだ大学の附置研の段階ですが、これは必ず何年か先に、KEK、JAEA、JAXA 他にも拡がると思います。その結果何が起こるかと言えば人材の枯渇です。人材確保が難しくなる原因が制度にあるのであれば、どこかで変える必要があると思います。そういうことが実際に起こっているのだということも知っていただければと思います。

司会／香山教授

司会として不適切な発言をさせていただきますと、制度の問題だけではなく、一部は附置研内部の問題も多いのではないかと個人的には思います。少し若い人に聞いてみたいと思います。

C：四電助教（京都大学）

私は京都大学に勤務し、附置研ではなくて工学系研究科に属しています。新入生と何度か話す機会がありますが、彼らはビッグサイエンス、特に核融合にも興味を持っている学生が大勢います。それが上に上がってくるにつれて興味を持続できない、という状況が折々見られます。そこを何とか維持していけるような状況を作っていけば、そういう問題もある程度解決に向かうのではないかと個人的には考えています。

司会／香山教授

最後に吉川先生に締めめの言葉をいただきたいと思います。

C：吉川允二元原研理事長

フォーラムが核融合エネルギー奨励賞を創設したのは、若い人が元気を出して今後の核融合エネルギーの研究開発を引っ張っていくためだと思います。私が学生の頃は、日本も大学も貧乏でしたが、何かやってやろうという意気込みがあったと思います。若い人材の確保や育成については、制度上の問題を平然として越えて行くようなやる気をどう喚起し、どう生き抜いていくか、周りの諸先輩も適切にアドバイスして、良い人材の育成に努めていただければと思います。

司会／香山教授

どうもありがとうございました。以上で、本日の全体会合を閉会させていただきます。本日は皆様、ご出席ありがとうございました。